

中山南路を歩く

片倉 佳史

人口260万を数える台北。発展を続けるこの町の歴史を辿ってみよう。連載13回目となる今回は、中山南路を中心に、付近に点在する日本統治時代の歴史建築の数々を紹介してみたい。

片側三車線、「三線道路」と呼ばれた道

連載第1回目でも紹介したように、現在、中山南路と呼ばれる幹線道路は旧台北城の城壁があった場所に敷かれている。日本統治時代が始まる前、台北は周囲に城壁が設けられており、その内側に町並みが広がっていた。

この城壁は現在の忠孝西路、中華路、愛国西路、そして中山南路である。いずれも城壁が撤去された後、敷地が道路として整備されている。これは片側3車線を誇っていたことから、「三線道路」と呼ばれていた。街路樹が設けられ、道路そのものが公園のような雰囲気だったため、台北を代表する景観にも挙げられていた。

三線道路の竣工は1909（明治42）年とされる。城壁は撤去され、運び出された石材は上下水道の整備などに用いられた。そして、一部が台北監獄



三線道路。台北城の城壁は撤去されて道路となった。車が少なかった時代、片側三車線の道路は非常に珍しかった。中山南路を北上すると中山北路で、これを合わせて勅使街道、もしくは御成道路と呼ばれた。

の塀に用いられた。この塀は監獄そのものが移転した現在も残っており、金山南路の中華電信中山大樓の脇で目にできる。現在は台北市が指定する古蹟でもあり、保存されている。

監察院—珍しいビザンチン様式の庁舎

台北市内には数々の歴史建築が残っている。多くが日本統治時代に設けられた官庁建築だが、その中で優雅さを競うのであれば、この建物を上回るものは多くない。忠孝東路と中山北路の交差点、台北市の東西南北を結ぶメインルートが交わる地点に建つ建物である。

中華民国監察院として使用されているこの建物は、日本統治時代に台北州庁として造営された。赤煉瓦の落ち着いた色合いを基調とし、花崗岩の白い帯を巡らせている。このスタイルは連載第10回で紹介した「辰野式」の流れをくんでいる。明治の建築王、辰野金吾にちなんだもので、台湾総督府（現総統府）や台湾総督府医院（現国立台湾大学医院旧館）などに通じるデザインである。

建物の正面に立ってみると、中央には大きなドームが据えられ、その脇を小ドームが固めている。こういったスタイルは台湾では例が少ない。大小のドームが並ぶこのスタイルはビザンチン様式と称されている。

ドームは当初は銅葺きだった。銅は高価ではあるが、腐食に強いので、官庁建築や寺社建築、高級住宅などの建築資材として用いられた。また、本来は赤銅色をしているが、二酸化炭素との反応



監察院。台湾を代表する官庁建築の一つだった。大小のドームを併せ持つ独特なたたずまい。事前申請をすれば、館内の見学も可能。夜間にはライトアップも施される。

により、緑青色に変化していく。こういった100年がかりの色の变化も見込んで銅板が採用されたという。つまり、どの時代であっても、見る者に新鮮な印象を与えられることを見込まれていたのである。しかし、残念ながら、この建物の銅葺き屋根は改修時に失われてしまった。

森山松之助が手がけた瀟洒な建造物

この建物の竣工は1915（大正4）年のことだった。同年4月24日に新庁舎移転の式典が挙行されている。建坪数は1075坪。なお、両翼部についてはやや遅れ、1925年に増築された。総工費は27万円という記録が残っている。

設計を担当したのは台湾総督府技師の森山松之助であった。森山は辰野金吾の弟子であり、台湾建築界に最も大きな影響を与えた人物とされる。1907（明治40）年から台北に暮らし、台湾総督府庁舎の設計に携わったほか、台中州庁（現台中市政府）、台南州庁（現国立台湾文学館）など、官庁建築を多く手がけた。

建物自体は往時の姿を保っているが、手狭になってしまったこの建物を補完するべく、後方には8階建てのビルが設けられている。この高層建築が設けられた際、歴史建築の持つ風格を壊さぬよう、塗装や配色に細心の配慮が払われたという。



中央の大ドームを内部から見る。竣工時、ドームの外面には銅板が葺かれていた。

そんな努力もあって、老建築の尊厳は保たれているように見える。

1995年3月28日には台北市が指定する古蹟となり、保存対象となった。外観は常時見学ができ、館内も事前に申請をすれば見学が可能だ。中国語か英語のみとなるが、解説員もいる。

消えた大島久満次の銅像

建物の前には、かつて大きなロータリーが設けられていた。そして、中央部には銅像が立っていた。これは第5代台湾総督府民政長官を務めた大島久満次（くまじ）の像で、石組みの台座の上にブロンズ製の像が立っていた。道路面よりも1・2メートル高い位置にあったため、よく目だったようである。 casting is 齋藤成美、台座の設計を担ったのは森山松之助と井手薫だった。

大島久満次は1908（明治41）年5月から1910年8月まで台湾総督府民政長官の地位にあった人物である。もともとは法務課長や警察本署署長などを務め、抗日勢力の制圧に深く関わっていた。1908年5月に民政長官となったが、2年あまりで



監察院（旧台北州庁）を遠望する。かつてロータリーと大島久満次の銅像があった場所は完全に整地されており、往時を偲ぶことはできない。



日本統治時代に撮影された古写真。建物の前に立っているのは第5代民政長官大島久満次の像。

台湾を去る。その後は神奈川県知事などを務めた。

銅像はもちろんのこと、現在はロータリーがあったことも全く想像できないほどの変貌ぶりである。また、戦後の話ではあるが、このロータリーから見て、中山北路の北側には高架橋が設けられていた。これは鉄道線路を跨ぐためのものだったが、鉄道が地下化されると、これも無用となり、取り壊された。現在、鉄道用地には市民大道という道路が走っている。

行政院—かつての台北市役所を訪ねる

忠孝東路を挟んで監察院に対峙するこの建物は台北市役所として建てられた。現在は中華民国行政院の庁舎となっている。建物の竣工は1940（昭和15）年で、翌年から使用されている。つまり、

竣工からわずか5年足らずで終戦を迎え、中華民国に接收された歴史をもつ。

監察院は比較的、開放的な雰囲気だが、こちらは前庭を擁し、奥まっているためか、やや重苦しい空気が漂う。警備員が常駐していることもあり、緊張感も禁じ得ない。

デザインは無駄を排したシンプルなもの。建坪数は1122坪という記録が残る。1936（昭和11）年に2カ年事業として造営が計画され、翌年から工事が始まっている。竣工はやや遅れて1940（昭和15）年。設計は台湾総督府営繕課技師の井手薫であった。総工費は当初120万円が計上されていたが、最終的には151万円という巨費が投じられている。

正面中央部は4階建てとなっているが、両脇の部分は3階建て。戦後も建物自体が大きな改修を受けることがなかったため、ほぼ原型を保っている。前面のベランダも、すっきりとした印象を与えている。すでに機能が重視された時代で、鉄筋コンクリート構造の建築物が普及していたこともあって、古さのようなものはほとんど感じない。

表面には黄土色の地味な色合いのタイルが貼られている。タイル自体はすっきりとした色合いだが、明るいイメージはない。これは台北高等法院（現司法院）や台北公会堂（旧中山堂）と同様、国防色と呼ばれた色合いである。国防色と言えば、浅緑色かこの黄土色が多く見られるが、空襲を意



行政院全景。台北の市制施行は1920年。戦後は228事件の舞台にもなった。



大講堂の様子。東面と西面に中庭が広がっており、屋内からは常に緑が感じられるように配慮されている。

識せざるを得なかった当時の世相が見え隠れしている。

台北市の歴史

台北は1920（大正9）年7月30日に市制が公布されている。これは同年10月1日から施行され、台北市となった。この時には台中と台南が市となり、これが台湾で最も早く市制を敷いた都市となった。台湾南部最大の都市である高雄はやや遅れ、1924（大正13）年12月25日に基隆とともに、市に昇格している。

この建物が台北市役所として機能したのは、終戦までのわずか5年である。中華民国政府に接收されると、1945年9月1日に台湾省行政長官公署と改められた。その後、1947年には台湾の戦後最大の悲劇とされる228事件が勃発。外省人による腐敗政治と横暴を非難する人々が押しかけ、時の行政長官陳儀（後に国民党政府によって銃殺刑）に抗議をした。ここはそういった歴史の現場でもある。

市役所の機能は戦後の約半世紀、旧台北市建成小学校の校舎に移されていた。そして、1994年に信義新都心地区の現庁舎が完成している。長い時間、この学校建築が台北市政府を名乗っていたためか、台北市民でも若い世代を中心に、旧建成小学校校舎が日本統治時代の市役所だったと勘違い

していることが多い。なお、現在、この校舎は台北市當代藝術館の名で、モダンアートを展示・紹介する美術館となっている。

古蹟として参観が可能となった

現在、この建物は毎週金曜日に限って、内部の参観が可能となっている。外国人の場合はパスポート携帯が義務付けられているが、問題なく見学はできる。入口は正面玄関ではなく、天津街にある通用門にあり、荷物検査を経た後、ガイドとともに順路に従って参観する。

この建物は1959年から行政院が使用しており、現役の行政庁舎である。しかし、台湾では歴史建築に対する保護が熱心に行なわれており、同時に、こういった老建築を郷土探究の教材として扱い、広めていくことが模索されている。この場合、国家が管理する「国定古蹟」となっている。

建物としては竣工年代の関係もあり、建築美というよりは機能美が優先されている印象だが、見どころは少なくない。

たとえば、通用門には靴の洗い場が残されている。これは馬車が使われていた時代によく見られたもので、靴に付いた泥を落とすための洗い場だ。また、庁舎内の窓にも注目したい。これは滑車を用いて上下し、いわゆるフリーストップ式となっている。

さらに、この建物は旧台湾総督府庁舎などと同様、上から眺めると、「日」の字型をしている。四周に事務室を配し、中央には大講堂が設けられている。この講堂はかつての台北市議会議事堂である。講堂からは両脇に中庭の緑が眺められ、優雅な雰囲気となっている。

最後にこの建物の正面玄関の門扉に注目してみよう。大きくて厚い門扉だが、そこには原住民族の彫刻をモチーフにしたデザインが施されている。幾何学的な模様にも見えるが、これはパイワン族の人々が手がけた彫刻を題材としている。



入口の泥落とし。官庁建築の入口には靴の泥を落とすための水道が設けられていた。この場合、現在は使用されていないものの、その痕跡が確認できる。



フリーストップ式の窓。機能が重視され、装飾などは見られませんが、階段や窓枠などに注目してみると、凝った作りであることが理解できる。



玄関ホールには台湾産の大理石が用いられている。門扉にかたどられた高砂族の彫刻デザインにも注目したい。

また、このホールの壁や床には台湾産の大理石がふんだんに用いられている。昭和時代を迎え、「台湾らしさ」というものが建築物に盛り込まれるようになっていたのである。これを「時代性」と捉えられるなら、この建物への興味はより高まってくるに違いない。

立法院—旧台北州立台北第二高等女学校

監察院から中山南路を南に進んでみよう。青島東路を挟んで対峙するのは中華民国立法院の庁舎である。立法院とは日本の国会に相当する機関で、その庁舎はかつての女学校校舎である。終戦までの名は台北第二高等女学校。現在も往時の面影を感じさせている。

公立の高等女学校は台北市内には第一、第二、第三と三校が存在した（このほかに私立の女学校がある）。そのうち、第一と第二は日本人（当時は「内地人」を名乗っていた）子女のために設けられた学校で、第三は台湾人（同「本島人」）子女の入学枠がある程度確保されていた。そして、この第二高等女学校も生徒の9割近くが内地人であった。つまり、台湾人の入学は非常に難しかった。前回紹介した第一高等女学校と同様、植民地統治下における教育機会の差別が明確になった空間である。

終戦を迎えると、こうした状況は災いとなった。日本が台湾の領有権を放棄すると、その後の管理が蒋介石率いる中華民国政府に委ねられた。その際、国民党政府は台湾総督府が有していた資産を接収し、台湾社会に還元されることはなかった。そして、日本人は台湾に残ることを許されず、引き揚げという形で台湾を離れることになる。

その際、生徒の大半を内地人が占めていた第一、第二高等女学校は存続そのものが危ういものになってしまう。結局、新たに台湾へやってきた外省人子女のために、第一はエリート養成機関として残ったが、第二は廃校処分を受けてしまう。戦



正面玄関。現在は立法院として使用されている。戦時中の爆撃を受けたため、戦後におおがかりな修復が行なわれている。



青島東路に面した校舎は1936年に造営されたものである。モダニズムの流れをくむ建物である。

時中の爆撃による被害も大きく、結局、学校そのものの存在が消滅させられてしまった。

現在も使用されている校舎

台北市第二高等女学校の校舎は今も残されており、中華民国立法院の庁舎として使用されている。戦災を受け、戦後に大がかりな改修と改造を受けているが、なんとかその姿を留めている。

正面玄関は中山南路に面しているが、ここは改修工事を経て大きく変わっている。しかし、校舎そのものは昔のままで、赤煉瓦の落ちついた色合いが印象的だ。その上方を見ると、日本式の黒瓦屋根を抱いている。少々見慣れないスタイルだが、その組み合わせは新鮮だ。

こういった赤煉瓦造りの建物に日本式の黒瓦を抱く建物は台湾では散見できる。台北市内では国立台湾大学の敷地内にある高等農林学校校舎（現行政大樓）などがあり、郊外では新竹州庁舎（現新竹市政府）などがある。

館内入ると、手入れの行き届いた植え込みと中庭が前方に見える。かつての校舎は「U」字型をしており、三方から中庭を取り囲んでいた。この中庭の奥にかつてはグラウンドがあった。両者とも、戦後は駐車場になっていたが、往時の様子を想像することはできる。

開学当初、校舎は「L」字型をしていたが、1936（昭和11）年に北面に新校舎が増築されている。この部分は3階建てであり、屋根も黒瓦葺きではない。色合いも現在は統一感のある赤煉瓦風の色合いだが、当時は黄土色だったという。

敷地内を歩いていると、学校らしい雰囲気強く感じられる。廊下は中庭に沿って設けられ、水飲み場なども残っている。各教室はそれぞれ事務室や議員秘書室などに変わっているが、窓枠や扉などの細部を見ていると、ここはやはり学校だったということを思い知らされる。

現在、この建物は古蹟に指定されることはなく、保存対象にもなっていない。これは戦時中の爆撃で倒壊した部分が多く、その価値が認められないというのが理由だが、確かに1945年に米軍によって空撮された爆撃後の状況を見ると、旧校舎などは屋根がほとんど吹き飛ばされており、壁だけがかるうじて残っている状態である。

また、立法院という性格上、建物内部の参観は認められていない。内部の様子を目にできる機会は非常に限られているというのが現実だ。しかし、今も時折、日本から卒業生が訪れることがあるという。卒業生たちは「撫子会」という組織を作り、活動している。

私がここを取材した際、担当者は「そういった先輩たちが訪れた時には、できるかぎり見学を受

け入れたい」と語っていた。そういった台湾人の優しさと思いやりに涙を流す人々は少なくない。

台北第二高等女学校校歌

(作詞：星合愛人、作曲：小出信) ※撫子会提供

1

稲の穂波に 風そよぎ
こがね玉ちる 蓬萊の
島の都に かがやける
わが学び舎ぞ うつくしき

2

若葉青葉の 色かへぬ
木木のみどりは わが操
をとめ心の きよらかに
そめて織りなせ あや錦

3

學と徳とを つみあげて
聳ゆる峰の 大屯は
なせば成るとの いましめを
つよくもさとす 姿かな

4

流れてやまぬ 淡水の
はてなき海に そそぐごと
ときに先立つ 学園の
理想の海に こぎ出でむ

美しさを誇る教会建築 —台湾基督長老教会濟南教會

台湾基督長老教会濟南教會と呼ばれる教会がある。これはかつての日本基督教団台北幸(さいわい)町教会で、戦前から宗教建築の白眉とされていた。言うまでもなく、台湾を代表する教会建築としても名を馳せていた。

日本に比べると、台湾にはキリスト教信者が多い。町歩きをしても、教会を見かけることは珍しくない。しかし、そういった中で、戦前から続いている教会を探してみると、その数は多くは



赤煉瓦造りの美しい教会建築である。国家イベントがある際には夜間のライトアップも施されて美しさを増す。

ない。なお、台湾では「基督教」はプロテスタント(新教)を意味し、カトリック(旧教)の「天主教」とは明確に使い分けられている。

この教会の竣工は1916(大正5)年だった。設計を担当したのは、この時代、台北市内で数多くの建築物を手がけた台湾総督府技師の井手薫。1911(明治44)年に先述の森山松之助からの依頼を受け、井手は台湾にやってきた。その後、約一年の欧米出張を経て1923(大正12)年に民政部土木局営繕課長となる。さらに1929(昭和4)年には総督官房営繕課長となり、台湾建築学会の会長にもなっている。

井手は台北の都市計画や史料編纂にも深く関わっており、台湾の歴史を探究する上では欠かせない人物である。彼が手がけた建築物は、この教会のほか、台北高等学校講堂(現国立台湾師範大學禮堂)、台湾総督府高等法院(現司法大厦)、台北公会堂(現中山堂)、台北市役所(現行政院)などがある。特に終戦までの昭和期の大型建築にはほぼ関わりを持っている。

赤煉瓦と「唹哩岸石」が用いられた

この教会は教堂部と鐘樓部が組み合わさったスタイルとなっている。教堂については壮麗さを際立たせたゴシック調のデザインである。それでも、上部に据え付けられた十字架は思いのほか小

ぶりで、そのためか、教会らしさという雰囲気は強くない。

また、鐘楼が教堂に並列しているスタイルも当時は例が少なく、珍しいものとされていた。館内もすっきりとした印象をまとっているが、こちらは教会特有の壮麗さをしっかりと兼ね備えているように思える。

建物外壁は南国の日差しに照らされた赤煉瓦が独特な色合いとなっている。そして、玄関には台北北郊の唹哩岸（きりがん）という土地で採掘された石塊が用いられている。この教会に限らず、この「唹哩岸石」と呼ばれる石材は大正期までの台湾の建築物では幅広く使用されている。

余談となるが、唹哩岸という地名にまつわる歴史秘話も紹介したい。昭和13年に刊行された『台湾地名研究』（安倍明義）によれば、唹哩岸はかつて台北盆地に暮らしていたケタガラン族の人々が用いていた地名だという。しかし、その歴史をたどると、スペイン人が淡水一帯に拠点を構えていた頃に生まれている。

当時、スペイン人たちは淡水から川を上がって台北（当時の中心は萬華一帯）を目指したが、このあたりの地形が船隊が拠点としていたフィリピンのイリガン（ミンダナオ島北部の港湾都市）に似ており、これにケタガラン語の地名の接頭語である「キ」が付いて「キリガン」になったと安倍は述べている。

なお、この教会に集まってくる信者は病院関係者が多かったと言われている。そして、この建物の後方一帯は日本人官吏の住む住宅街であった。終戦までは幸町と呼ばれ、今も木造家屋が何棟か残っている。

こういった家屋に住んでいた人々は終戦後、すべて日本へ引き揚げているが、現在もなお、細い路地を歩いていると、木造の日本家屋が残ったりして独特な雰囲気となっている。



館内の様子。日本統治時代は内地人（本土出身者とその家族）の信者が多かった。戦後の一時期、外省人信者と本省人信者の対立が見られたこともあった。

台湾医学界を牽引した教育機関

台湾基督長老教会済南教會からさらに南に進んでいく。現在教育部（日本の文部科学省に相当）のある場所は、日本統治時代に台湾総督府中央研究所のあった場所である。産業開発から衛生管理、地理・歴史、民俗学に至るまで、幅広い研究を行っていた。

1939年には改組を経て、ここは工業研究所と熱帯医学研究所となった。ルネサンス風の瀟洒な建物で知られていたが、残念ながら、戦時中に米軍機の爆撃を受けて全壊。建て直されることはなく、戦後に現在の建物が建てられ、教育部が使用するようになった。

その南には広大な敷地を誇る国立台湾大學附設醫院がある。日本統治時代の台湾総督府台北医院は中山南路を挟んだ向かいに位置している。これは現在、国立台湾大学医院旧館となっている。

そして、さらに南にあるのが、旧台北帝国大学医学部・医学専門部である。ここは現在、「台大醫學院舊館」という名で呼ばれており、台北市が指

定する古蹟となっている。

訪れてみると、クリーム色の優しい色合いの壁面が南国の日差しに照らされている。建物は一部だけが残る状態になっており、中山南路を南下していくと、建物を裏側から見るような形となるが、敷地全体はしっかりと管理されている。

こちらの面はかつて講堂だった場所である。1985年に講堂の大部分と教室の部分が取り壊されてしまい、ステージの部分だけが外壁のような形になって見える。正直なところ、少々おかしな格好なのだが、天気恵まれれば、植えられた芝生に映えて美しい。

正面玄関は仁愛路に面している。入口には石組みの門柱が残されており、歴史を感じさせている。この建物はもともと、台湾総督府医学校の校舎として建てられたものである。熱帯病理学の権威として君臨した同校のシンボルだった。その後、1919(大正8)年に医事専門学校となり、1928(昭和3)年に台北帝国大学医学部に編入されている。通称としては、今も「医学校」と呼んでいる古老も少なくない。

竣工以来、台湾医学界の発展に貢献してきた建築物である。どっしりとした構えは風格を漂わせているが、周囲には亜熱帯の緑が生い茂り、老建築もその中にとけ込んでいるように見える。

校友会館として親しまれる老建築

仁愛路の側に立ってこの建物を眺めると、優雅な雰囲気ではあるが、戦時中に激しく被弾したという屋根などは修復されており、元のままの姿とは言えない。

現存するこの建物はかつて2号館と呼ばれたものである。設計には西門红楼や台湾総督府医院の設計者である近藤十郎(じゅうろう)のほか、小野木孝治(たかはる)らが携わっている。

すでに90年以上の歳月を経ていることもあり、木造部分を中心に傷みは激しかったという。しか

し、1995年1月には卒業生から寄付が寄せられ、同年8月から修復工事が始まった。1998年2月21日に工事は終わり、盛大な式典が催された。そして、歴史建築保存の機運が高まる中、1998年3月25日に台北市から古蹟の指定を受けた。

現在は校友会館という名目で、学生や卒業生たちが集う公共スペースとなっている。2009年には醫學人文博物館の名も与えられ、館内には台湾医学界の歩みを紹介する展示や講演スペースなどが設けられている。

さらに、台湾医学界に功績を残した人物の胸像も展示されている。まずは初代校長の山口秀高(ひでたか)、第3代校長の堀内次男(つぎお)、台湾総督府医院長を務めた高木友枝(ともえ)のほ



1世紀近い歴史を誇るこの建物は、台湾医学界のシンボルとして君臨してきた。



仁愛路に面した正面の様子。現存するのはこの2号館のみとなっている。

か、台湾初の医学博士である杜聡明（とそうめい）の像があり、そのほかにも、第3代医学部長を務めた森於菟（もりおと）の展示もある。

この森は文豪森鷗外の実子で、医学部の教授を長く務めた。なお、山口秀高と高木友枝の像は大理石を用いた石像で、彫刻家北村四海（しかい）の手による。北村は石彫の彫刻家として知られていた。

ここには、カフェなども併設されているので、町歩き途中に立ち寄ってみるのもいいかもしれない。



高木友枝と堀内次男の像。戦後、長らく日の目を見ることがなかったが、現在は広く展示されている。



壮麗さを極めた老建築は今もなお、強烈な存在感を示している。現在は内部も自由に参観できる。



石組みの門柱も健在だ。日本統治下、台湾の学校の門柱はどこもしっかりとした造りであった。

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは30冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けており、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も行なっている。著書に『台湾 鉄道の旅』（JTBキャンブックス）、『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『観光コースでない台湾』（高文研）『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社新書）など。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』（玉山社）などの著作がある。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>